

藩政時代の歴史的風景を再現

VR本公開

市内に残る歴史的建造物を活用して新たな魅力創出を図る「伊達な歴史の体験」を昨年度より実施しています。その一環として、現実にはない空間をあたかも現実のように体験できる技術「VR(バーチャルリアリティ)」を活用して、歴史的風景等を再現する取り組みを進めています。

昨年11月には、仙台城跡から望む藩政時代の街並みをVRで再現した試用版を公開。多くの観光客などが、CGで再現された武家屋敷や町家などが広がる風景と現在の街並みを見比べて楽しんでいました。

3月29日には、大手門跡や大橋、



仙台城(大広間)

芭蕉の辻



陸奥国分寺

▲VRイメージ

芭蕉の辻など、公開場所を6カ所に拡大して、本公開を開始。仙台城の大広間や奈良時代の陸奥国分寺などを再現しています。

また、本公開に合わせて、青葉山付近の歩道5カ所に大手門や仙台七夕まつりなどのイラストを施したデザインマンホールを設置しました。

今後VRをはじめ、さまざまな体験プログラムを通じて、伊達な文化の魅力を広く国内外に発信していきます。



市政トピックス

多様な提案集まる 集団移転跡地活用の事業候補者決定

市では、東部沿岸部の集団移転跡地を民間の自由な発想を生かして市の新たな魅力を創出する場として活用する取り組みを進めています。

平成29年度に1回目の利活用事業者を公募し、これまで9団体を

市政トピックス

乗り合いタクシー 2回目の試験運行開始

「みんなでつくろう地域交通ネットワーク支援事業」は、地域の方が主体となり、地域の足の確保に取り組む団体に対して、市が経費の助成などを行う事業です。

丘陵地で道路が狭く、大型バスの運行が難しい宮城野区燕沢地区では、日常生活に必要不可欠な移動手段を確保するため、本事業を活用して、既存の公共交通を補完する「地域交通」の導入を検討しています。



▲4月2日午前8時に出発した第1便の「のりあい・つばめ」。毎週火・水・金曜日1日8便運行します

昨年10月に定員9人のジャンボタクシー、通称「のりあい・つばめ」の試験運行を1カ月間実施。目標収支率20パーセントを達成したことから、4月2日より2回目の試験運行をスタートさせました。今回は、利用者からの要望が多かった、仙台オーブン病院やJR東仙台駅までルート延伸したほ

市政トピックス

いじめの防止等に関する条例が施行

子どもたちがいじめによって悩み、苦しむことなく、安心して学び、健やかに成長することができるとのまちの実現を目的に、「仙台市いじめの防止等に関する条例」が、4月1日に施行されました。

いじめは、子どもの教育を受ける権利や、愛され、保護され、心身の健やかな成長を保障されるという子どもの持つ権利を侵害し、その人格の形成に影響を与えるだけではない。心身に重大な危険を生じさせる恐れがある決して許されない行為です。

条例の下、教職員一人一人が、子どもたちに寄り添い、丁寧に向き合う意識を持って、迅速かつ適切にいじめに対応していきます。また、教職員や保護者、地域の方々が連携を図りながら、いじめの未然防止や早期発見に取り組むなど、社会全体で子どもたちをいじめから守る環境づくりを進めていきます。

市政トピックス

仙台市実施計画を策定しました

市では、令和元年度・2年度を計画期間とする「仙台市実施計画」を策定しました。これは平成23年度からの10年間を計画期間とする「仙台市基本計画」の目標を着実に実現するとともに、東日本大震災における長期的な課題に対応するため、今後2年間に取り組む事業の概要をまとめたものです。

実施計画は市ホームページのほか、市役所本庁舎1階市政情報センター、宮城野区・若林区・太白区情報センター、区役所総合案内、

市政トピックス

百獣の王が新たに仲間入り

昨年9月にメスのオニールが亡くなって以来、ライオンが不在だったセルコホームズパークに、スズメ山(八木山動物公園)からの3月に、広島市安佐動物公園からオスのライオン「サン」と秋田市大森山動物園「あきぎんオモリ」の森からメスの「なお」が望みの仲間入りをしました。

昨年9月生まれのくりっとした目が愛らしい2頭は、やんちゃでとても元気。園の生活に慣れ次第、一般公開予定です。公開日が決まりましたら、ホームページでお知らせします。お楽しみに。



▲サン ▼なお



3.11 震災文庫を語り読む

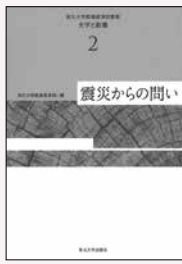
東日本大震災を語り継ぐための市民図書館に設けた「3.11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

震災への想いを表現し、他者へ伝える言葉を探す

東北大学名誉教授 花輪 公雄



「語りきれないこと」 危機と傷みの哲学



「震災からの問い」

これまで誰もが経験しなかった超巨大地震による揺れと津波、そして福島第一原発事故による大惨事は「東日本大震災」と名付けられました。この出来事に遭遇した私たち一人一人に「3.11」があります。3.11をどう捉え、何を学び、それをどう他者へ、そして次世代へと伝えていけばよいのでしょうか。私たちが震災後も生きるといふことは、震災に対する想いを表現し、そして伝える言葉を探することに他ならないのだと思います。

「語りきれないこと」危機と傷みの哲学」は、臨床哲学者である鷲田清一さん(せんだいメデアテーク館長)の震災1年後の想いを綴ったものです。鷲田さんは、被災した人たちは自己の生存について語り直すこと

を迫られているとします。しかし、言葉の外に本当の感情があるにもかかわらず、それを表現するのも言葉に他ならないので、言葉が生まれる瞬間を待つまで、語り直しが繰り返す要請されると述べています。

「震災からの問い」には、東北大学所属教員による震災以後の教養の在り方に関するさまざまな想いが収められています。その一つが小林隆さん(文学研究科教授)による「震災と言葉」被災地にとって方言とは何か?」です。被災地の調査を踏まえ、その土地の人たちの魂がこもっている方言は、ときにコミュニケーションの障害とも成りうるが、心の豊かさを取り戻すという役割で、被災地の復興を担うことが述べられています。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585